

第四節

生命活動の場

舍利子 是諸法空相

不生不滅 不垢不淨 不增不減

【漢文直訳】

舍利子よ、この諸法は空を相とし、生ぜず、滅せず、垢つかず、 淨からず、増さず、減らず。

【サンスクリット語直訳】

ここでシャーリプットラよ、すべての事象は空であることを特質とし、生ずることもなく、滅することもなく、穢れもなく、穢れないものでもなく、欠損があるのでもなく、完全に満ちているのでもない。

【現代用語による解釈】

[再定義：諸法は『事象』を存在させる。諸法は、『事象』を生成し、制御し、人間の生み出す「事象」を絶対普遍の価値体系の下に管理する。諸法は、生命活動を展開するための場である]

舍利子よ。諸法は空相である。

ここで空相は、空の直轄の下にあり、空を変換投影した『多元環境』であり、しかも『二元領域』的な生と滅の対立の中には無く、垢と淨の対立の中には無く、増と減の対立の中にはない。

□この節はたった二十文字であり、簡単に解釈を済ませようとすれば、「諸法は空相である。何故なら『多元領域』であるから。」で済んでしまう。

しかし、般若心経の暗号を解いてみれば、この諸法の語句は、後述するように、古い意味ではなく、新たな意味に再定義されていて、その再定義された新しい意味を発見し、それに沿って解釈しなければならないことになる。

この節の持つ意味は実に豊富で、最も密度の濃い節である。そしてこの節は、最も簡単に見えて、最も暗号解読が困難な節である。この、たった二十文字の中に込められた情報量は膨大である。それをこれから解き明かしていく。

□前節で示した空そのものの『色と受想行識』は、それだけでは《宇宙の生命活動》を成就できない。当然そこには活動のための環境が必要である。

そこで諸法の語句の再定義が成され、諸法が『色と受想行識』の活動を支える役割を持つ概念として登場する。

これで、《宇宙の生命活動》を説明するための、全条件が整ったことになる。

□諸法は生命活動の場である。以後内容が複雑になるので、この諸法のイメージを前もって掴んで於くことが理解を助けてくれる。そこで、比喻を用いて大胆に言うなら、諸法とは司法・行政・立法の三権を持つ国家機関みたいなものである。そのようなイメージで以下を読み進んで欲しい。

人間が生きる環境を全て管理、運営するシステムである。空は色であり、受想行識であるから、「人間」の創るシステムも、空の創るシステムと似ているのである。多層次元の中に、次元数を変えて、似たようなシステムを創るのである。そしてそれが『フラクタル』であり、最終的に『フラクタル共鳴』に至るのである。

□諸法を初期仏教で遣われた事象の意味から発展した語句として再利用し、『諸法とは《宇宙の生命活動》のための『多元環境』である』として、再定義したことになる。

前節で『超実体』の色を定義し、受想行識を定義し、そうすれば当然、『人間』が生きる環境を定義しなければならない。

環境は『人間』が直接創った存在ではないから、生命活動の結果としての『事象』を存在させ、『事象』を保存し、『事象』を処理し、『事象』を管理する環境という場を定義する必要性が出てくる。その様な場として、『事象』の根源的存在として、諸法という『多元領域Ⅱ』の存在を説くのは自然の流れなのである。

『超実体』を説く限りには、『超実体』と環境の関係を示さなければならない。それを、仏教としての継続性の中で、初期仏教の中で使用した語句から創り出さなければならないとしたら、やはりこの「法」の複数形しかないのだと思う。

苦勞している感じがするのだが、新しい造語を使えないという条件の中では、この諸法をもって、環境の根源としたのである。

そこで以下は、意味を重複させながら、内容を少しずつ進展させ、論理の飛躍が無いように注意しながら、詳細に説明することにする。

諸法空相の必要条件

□般若心経では、「悟りA」ではなく「悟りB」を求めているのであり、常に「人間」の立場からそれをどう扱うかを問題としている。【重要】。

諸法はそのまま空相である。諸法が成り立つためには空相であることが必要条件である。

この節の説明をすれば論理的にならざるを得ないが、本書の義務として、これはどうしても論理的に説明しなければならない。

□新たに再定義された諸法とは、『事象』と密接な関係にあるが、諸法自身は『事象』ではなく、「事象」でもなく、「現象」でもなく、「現象」と「事象」と『事象』を存在せしめ、その根源にあって、『事象』を管理し、コントロールして、受け入れている存在である。それを諸法と再定義した。

もう一つの文字列である不生不滅不垢不淨不増不減（以下「三対の語句」と呼称する）は、諸法が空であることの条件を満たしていることを示すと同時に、空の特質を次元を落として、「相」という形式に、具体的に表現していることを示している。それを空相と表現している。

諸法から見た不生不滅の意味であるが、これまで「時間軸を超越して」と表現してきた意味は、不生不滅と置き換えられる。

諸法は時間軸を超越して存在していることを示す。つまり、永遠に存在し続けていることを示すことで、諸法の特質を示そうとしている。

そのためには、時間軸上での始まりと終わりを示す生と滅を否定することで、即ち、不生不滅と表現することで、生と滅の『二元領域』を否定し、その事で、不生不滅は諸法であるための必要条件であることを示している。

もう少し詳しく説明しよう。ここで、生の文字と滅の文字は、時間軸の中での、始まりと終わりを示す文字である。このことは十分に明らかであり、疑う人は居ない筈だ。

従って、不生不滅とは、始まりが無く、終わりが無い、と言うことであり、それは時間軸を超越して、始まりも終わりもなく、常に存在し続けている、という意味になる。これが空の基本特質である。

これまで『時間軸を超越して』との表現と説明は、何度も出てきているので、十分納得できる内容と思う。即ち、『諸法は時間軸において不生不滅である。』ということを示した事になる。

さらに、この基本特質の下に、諸法の具体的説明として、不増不減として、変化変容する『事象』の世界を否定すると共に、時間も空間も、その中に満ちている物質の質量を含めた全エネルギーも、始まりも終わりも無いし、増加も減少も無い、としている。これは一部エネルギー保存の法則にも対応するのだが、ビッグバンまで考慮すると、この点は現代物理学の結論には一部反する。しかし般若心経の視点は、現代物理学の捉える「現象」の世界をその一部に含むように、大きく越えており、その「現象」を根源的に支える諸法を捉えているのであって、単純な比較は不可能である。そのことを知って、議論を先に進める。

次に、不垢不淨であるが、『事象』を《全存在》の中に入れて考えていることが現代人にとっては新鮮である。心の作用で生まれた『事象』を「存在」として扱い、その中に展開する価値観をも「存在」に追加しているのである。《宇宙の生命活動》とは、まさに《宇宙の理念》によって、心の作用で生まれた『事象』の展開した世界であることを示している。

そこで、不垢不淨とは「人間」世界の「事象」の中の価値観を支配している善と悪の『二元領域』的対立を否定する意味で、不垢不淨と表現することで、『二元領域』であることを否定し、相対価値としての善悪を超越した絶対普遍の価値体系を示している。即ち、諸法が絶対普遍の価値体系を創っていることを示している。空及び空相は完全なる存在であり、全肯定された存在であるから、そこに垢と淨の対立は存在しないのである。

人間が作る『事象』は人間から見る限り、相対価値の『二元領域』的存在であり、それを超越した存在が諸法である。その『事象』を管理する存在が諸法である。

□第五節で明らかになるが、理解のためには、結論を先に示しておこう。

《宇宙》という《全存在》の中で、空が定義され、空相が定義され、そうすれば残りは全て『事象』である。これが『事象』の定義でもある。

言い換えれば、《全存在》は『多元領域Ⅰ』と『多元領域Ⅱ』と『多元領域Ⅲ』からなり、『多元領域Ⅲ』は『事象』であり、これで全てである。

「三対の語句」から「不」を除けば、生滅、垢淨、増減となり、これは『事象』の世界を表していて、『多元領域Ⅲ』である。即ち、「不」の有る「三対の語句」は『多元領域Ⅲ』を否定していることになり、『多元領域Ⅲ』以外の『多元領域Ⅱ』と『多元領域Ⅰ』を表していることになる。それは即ち、空と空相を表していることになる。(後述)

『多元秩序』の導入

□諸法がその内に『事象』の展開を存在させるために、空相という絶対普遍の価値体系を持ち、『多元環境』と重なっている『多元秩序』の概念をここで定義する。(巻頭図を参照)

この絶対普遍の価値体系を空相としている『多元秩序』は人間の超越意識と、強い『フラクタル共鳴』関係にある。そして、超越意識を通じて人類は価値を共有しているのである。その意味でも諸法は人間の生きる環境なのである。

般若心経の暗号を解読する作業として、まったくの必然として、この結論に導かれて来たのだ。

即ち『多元秩序』が『事象』を扱うということは、相矛盾する複数の『二元領域』的存在の『事象』を「同時」に存在させる接着剤であり、空性の世界から『二元領域』の世界までを矛盾なく存在させている。

『多元秩序』は空性的存在と『二元領域』的存在を『フラクタル共鳴』として結合する作用を持つ。

□『多元秩序』は一部、「現象」のプラットフォームを構成している。さらに、「事象」のプラットフォームであり、『事象』のプラットフォームである。

我々現実世界に生きる「人間」からは、『多元秩序』の全体像は見えないが、唯一、「時間・空間・物質を含めた全エネルギー」は、「現象」を支える『多元秩序』の一部分であり、我々「人間」から観測・観察出来る唯一の空相であるのだ。まさに今、人間は諸法の一部に直接触れていることに成るのだ。

この解読結果の内容は、物理学を志した者としては、特に感慨深いところである。

□『事象』は諸法の中の『多元秩序』のプラットフォーム上で展開する。

『事象』の最下層である現実世界の「事象」と「現象」は最下層のプラットフォーム上で展開する。この最下層の世界を管理するに必要な基本構成要素（パラメータ）としては「時間・空間・物質を含むエネルギー」である。

そして同時に、高次元の『事象』は『多元秩序』のプラットフォーム上に展開している。五感を通して体験的に理解出来ているのは最下層のプラットフォームであるが、これら最下層、中層及び上層のプラットフォームは『フラクタル共鳴』関係にあり、連続的に結合している。

最下層のプラットフォームの構成要素（パラメータ）は「時間・空間・物質を含むエネルギー」であるが、中層及び上層の構成要素（パラメータ）は我々には未知の存在である。その未知の構成要素（パラメータ）は、我々の世界の「時間・空間・物質を含むエネルギー」と無関係ではあり得ない。その未知の構成要素（パラメータ）に対しては、[超時間・超空間・超物質を含む超エネルギー]と命名しておく。ただし、未知ではあるが、心の作用としての『事象』はこれらの未知の構成要素（パラメータ）によって管理運営されていることは明らかである。

ここで、各層を貫く構成要素（パラメータ）は、『フラクタル共鳴』関係にあり、密に関係している。この未知の構成要素（パラメータ）を発見できれば、人類は新しい世界に踏み込むことに成り、新しい価値の時代を迎えることが出来るだろう。

諸法は『多元秩序』を管理し、『多元秩序』は多層のプラットフォームをコントロールしている。これらは、『事象』の世界を支配するに必要な構成要素（パラメータ）を介して全プラットフォームをコントロールしている。

このように諸法は『事象』の世界を創造し、それをコントロールしている存在である。

具体的過ぎるように思われるかもしれないが、空相とは、まさに空を次元を下げ、具体化して形式にしたという意味であるから、具体的でなければならないのだ。我々が直接関わっている「時間・空間・物質を含むエネルギー」はこの空相の一部であるのだから、まさに具体的であるのだ。

これが般若心経に於ける、諸法の構造である。この『多元秩序』の理解の仕方を是非体得して欲しい。

□次に『事象』と不増不減の関係を示す必要がある。これは大きさや量の変化する概念を持つ『二元領域』的存在の変化変容を、否定する語句である。つまり、これは現実の人間の係わる『事象』を否定し、諸法は『事象』を超越した存在であることを示していることになる。

即ち、増と減とを「不」で否定することで、『二元領域』的存在であることを否定し、諸法は「現象」と『事象』による変化・変容・離散・集合を超越した存在であり、「現象」と『事象』のプラットフォームとしての『多元秩序』であることを示し、それが『多元領域Ⅱ』の姿であることを示している。

それ故に、『事象』は、諸法の機能としての『多元秩序』の上で展開される。「人間」が係わる『事象』もあれば、「人間」が係わらない『事象』もある。

諸法は『事象』を含まない『多元領域Ⅱ』の存在であるが、『多元領域Ⅲ』を管理し、『二元領域』的存在を含む『事象』の背後にあって、その『事象』をその内に存在せしめている。

□諸法自体は『多元領域Ⅱ』であり空相である。諸法がこのように再定義された事で、『人間』と諸法が創り出した『事象』の位置付けについても、読者にも見えてきたのではないだろうか。説明を続けよう。

諸法が再定義された事で、諸法は『事象』の管理者である事が明らかにされた。それ故に、初期仏教に於ける『事象』の機能や性質はかなり進展したことになる。『事象』の意味は、「人間」の思考と行動が係わるという観点において、初期仏教での、「人間」の認識が係わるとした意味と関連があるが、ここでの『事象』は『多元領域Ⅲ』の全ての領域を占めている点は注意を要する。

『事象』は『人間』と諸法の創造物であり、観音様の立場から見れば、既に『フラクタル共鳴』にあり、空性Aであるが、「人間」から見れば、一部が『フラクタル共鳴』にあり空性Bであり、しかしその一部は『フラクタル共鳴』にはない『二元領域』の状態にある。悟りを得ていないために『フラクタル共鳴』には至らない部分があるという意味である。

そこで、人間から見ると、厳密には『事象』は『フラクタル共鳴』には至らないので、「三対の語句」で否定することで、『事象』を除き、『多元領域Ⅱ』をその本質とする諸法は空相であると説明していることになる。

裏返して言えば、諸法は、《宇宙の生命活動》の「場」として、『多元環境』と『多元秩序』を用意し、そこに『事象』を展開しているという意味になる。即ち、諸法が用意した場は「人間」が係わらない限り、弱い空性を保っている。

□ここまでで『諸法』と『事象』の関係を理解出来たと思うが、説明が多少込み入っているので、以下の比喩を用意した。これで諸法と空相の理解を確認し、整理していただきたい。

それは即ち、コンピュータのハードウェアと基本ソフトウェアと応用ソフトウェアまでが『諸

法』であり空相である。ここには「三対の語句」が厳密に成立する。しかし、ここで取り扱う『データ』は全て『事象』であり、処理が終了すれば、即ち観音様から見れば一応「三対の語句」は成立し、その時は全てが空性となるが、しかし空相ではない。一方、現実を生きる人間から見れば、時間の一断面で見ることになり、『データ』は処理の途中段階であり、「三対の語句」は成立していない。

そこで空性は決して空相ではなく、この両者は重複することなく、厳密に区別されて定義されなければならない。ここではこの視点が重要である。

ここで「三対の語句」を厳密に当てはめ、将来空性となるべき『データ』に対しては成立しないとして、空相は『データ』を除いたコンピュータのハードウェアと基本ソフトウェアと応用ソフトウェアまでとしたのである。そこで、諸法は、空性を除くように、空相として再定義されたのである。

このように再定義することで、後の項目で示すように、空性、空、空相が、重複することなく、明確に分離して定義できることになり、『宇宙』が見事に整合性を持って説明できるのである。

□ここは重要な意味が凝縮している所だ。

諸法は空相として、厳密に定義された。そして諸法の一つの機能としての『多元秩序』に展開する『事象』についてさらに説明する。

そこで、「人間」が係わっている『事象』である「事象」が、『フラクタル共鳴』に至れば、それは空性Bであると定義される。

従って空性Bは、人によって異なり、それが観音様の場合は、『事象』の全範囲にまで広がっていて、空性Aとなる。

重要なことは、観音様の立場で言えば、空性Aだけで全て単純に済む事である。しかし般若心経の趣旨としては、空性Aにはなり得ない現実を生きる「人間」に合わせて、このような込み入った説明をしているのである。それで以下のように説明が複雑に成らざるを得ないのだ。複雑ではあっても、一度はしっかり説明に付いてきて、理解しておいて欲しい。

「事象」は人によって異なることから、沢山の異なる「事象」が存在することになる。それらを「同時」に存在させているのが『多元秩序』である。『事象』の世界は、複数の「事象」が同時に存在しているのであり、これはまさにパラレルワールドである。

ここで、『多元秩序』の機能の重要性を示しておこう。それは「事象」は複数同時に存在していることである。それは即ち、錯覚といえども全て「事象」として記録されていることになる。この意味の重大性については読者の熟慮に任せたい。

これらの『事象』群は諸法の持つ機能として、存在しているのであり、実際に、この『多元秩序』に展開する、膨大な数の「事象」の中で、『フラクタル共鳴』に至ったものが、個別の「事象」を統合して、拡大し、統合され、『多元領域Ⅲ』の中に有って、人類の共有財産となって、人類の未来を創って行くのである。『多元秩序』は空自身の変換投影として存在する。即ち空相としての絶対普遍の価値体系を構成していて、それを『事象』として表現しようとしている。『事象』の中の矛盾を解消しつつ、整理しつつ、一部を消滅させ、『フラクタル共鳴』に統合していくのだ。当然ここには、三世諸仏が係わり、観音様も係わることになる。

観音様が『事象』に係わるとしたことの意味は重要である。観音様は空性Aでありながら、現実を生きる「人間」の立場を百パーセント理解してくださっているのである。『多元領域Ⅲ』の本質は空性Aだからといって、不垢不淨だからといって、それをそのまま人間に押しつけることは絶対に無いのである。観音様から見れば、『二元領域』の錯覚の中に居る「人間」が考える善

悪はそのまま、絶対価値では無いのであるが、観音様は、人間が生きる上での善悪や、習慣や文化を完璧に理解してくださっていて、それを前提に係わってくださるのである。

その意味を込めて、般若心経の冒頭に観音様が登場するのである。

そして、これからの時代は、宗教を越え、無私に徹した普遍的な祈りこそ、この『フラクタル共鳴』のパワーを強めて行くことになる。暗号が解かれた般若心経は、まさに仏教でありながら、仏教を超越していて、『多元秩序』に直接作用する巨大なパワーを持つ經典である。

そして、これを個別の「人間」から見れば、潜在意識と顕在意識の中の『フラクタル共鳴』の部分として、空性Bとなり、それが多くの人と共鳴し、人類の共有財産となって行くのである。

そしてこれは、空相としての諸法の中での展開である。そして、もちろん、潜在意識と顕在意識は『多元領域Ⅲ』であることをここで確認しておく。

ここは重要部分なので、再度視点を変えて説明する。

「三対の語句」の意味を文字通り厳密に適応した存在で、しかも空相としての絶対普遍的価値体系を持ち、『事象』を管理する存在を、諸法と再定義したのだった。これは不変である。

一方「人間」に係わっている「事象」が、『フラクタル共鳴』に至った範囲を空性Bと定義する。これは一人一人異なる。しかし、最終的には観音様の見解である空性Aにまで達する。

空性Aと空性Bは同種類の空であり、領域は重複していて、諸法の上で展開し、そこに《宇宙の理念が表現された状態》を創り出す。

この場合、最終的には空性Bは空性Aに一致し、《宇宙の生命活動》は成就する。

諸法の存在を説いたことで、《宇宙》は整合性がとれて、合理的に記述できるのである。

□暗号を解いてみれば、この「三対の語句」は見事なまでに空相の必要条件となっていて、空相の中身をより具体的に示している事になるのだ。

般若心経において、『二元領域』を、「相対立する概念から成り立つ存在」とし、そして『多元領域Ⅱ』とは、「それを超越する存在」であることを明確に示していることになる。既に、般若心経編纂の時代に『多元領域Ⅰ』と『多元領域Ⅱ』とを理解し、それを見事に表現して、現代の我々に示しているという事実は驚嘆に値する。

我々現代人は、現代物理学の世界観に触れることが出来るから、どうにか空相を理解できるのである。否、空相の存在くらいは、どうにか予想できるのである。それを二千年も前の人たちが理解し、それを空相として定義し、導入していることには、言葉を失うほどの驚嘆を禁じ得ない。

しかしながら、この完璧なまでの空相の表現でありながら、私が手にしている数冊の般若心経の解説本や、資料として集めた文献では、まったく意味不明の解釈となっている。

これでは、般若心経の真実には一歩も近づけない筈だ。空虚な空の周りをぐるぐると回っているだけのように見えてくる。

三対の語句の纏め

□ここで次の展開のために、「三対の語句」を纏めて、諸法をさらに進展させて再定義する。

不生不滅は、空の特質としての、『超実体』の「永遠性」を示しており、生と滅を二元領域として対立的に示し、それを「不」で否定することで、時間軸上の超越性を示していることになる。即ち、時間軸を超越して存在していることを意味している。

不垢不浄は、空相の持つ絶対価値の特質である「絶対普遍の価値体系」を示している。垢と浄を二元領域として対立的に示し、それを「不」で否定することで、善と悪の対立する相対価値からの超越性を示しているのである。

不増不減は、諸法の特質として、「現象」からの超越性を示し、「現象」の背後にある時間と空間と物質を含むエネルギー等を諸法の一部として示すと同時に、複合的に人間の認識により、「空間と時間と意味とで部分を切り取った『二元領域』にしかなり得ない『事象』」からの超越性を示しているのである。

既に述べたように「三対の語句」は空相が成り立つ必要条件である。後述するが、この「三対の語句」は当然色即是空の空の必要条件でもあり、さらにこれを柔らかに適用すれば、皆空の必要条件とも成り得るのである。従って、これを一般化すれば、この「三対の語句」が必要条件として成り立つものを、形容詞を含めた広義の空と呼称したと言えるのである。

これに従って必然的に、二つの対立する概念に依って成り立つ存在、即ち『二元領域』の存在は空相ではなく、諸法でもなく、もちろん空でもない。

□般若心経の、空の分類に矛盾が無いように、そして観音様の見解と現実の「人間」の見解とを対応させるために、さらに「悟りA」と「悟りB」とに対応させるために、空性Aと空性Bの語句を用意した。

諸法は、現実を生きる人間の、矛盾する見解によって作られている断片的な『事象』を「同時」に存在せしめているのである。

諸法が創造した『多元秩序』のプラットフォーム上の『事象』は、「人間」が係わらない所では、弱い『フラクタル共鳴』の状況にある。しかしここに、「人間」が係わることで、『事象』はさらに展開し、一旦場は乱れる事があっても、さらに次の進化のために、新たな『フラクタル共鳴』へと向かい、強い『フラクタル共鳴』にまで進化する事で、再び『多元領域Ⅲ』的存在に進化し、《宇宙の生命活動》が、それだけ進展したことになる。

□初期仏教、及び西洋哲学に於いて、精神と物質の対立、即ち『二元領域』が議論されているが、般若心経では、これは説かれない。

敢えて、それを般若心経の立場から説けば、《宇宙》は本来《宇宙の理念》と《宇宙の理念の表現された状態》であるが、《宇宙の生命活動》の最前線の世界に降りて来て、空そのものの受想行識の立場から見ると、諸法が準備した世界とは次元数が大きく異なるので、その差が対比的に、『二元領域』に見える、というだけのことである。

物質はエネルギーを集約して密度を上げたものである。これは般若心経よりも、現代物理学がそれを語っている。従って肉体は物質から作られていることから、肉体は諸法の一部である。そして人間の精神の本質は完全空であり、人間の営む現象は「事象」であり、諸法の用意した「場」に空性を表現しようとしているのである。

精神と物質との『二元領域』とは、このような次元数の対比的な対立である。

諸法と多元秩序

空そのものである色受想行識は、肉体は諸法によって、諸法が準備したプロセスで創られ、空相である諸法が用意した『多元環境』の中に『事象』を展開し、そこに「生命活動」を展開し、そこに《宇宙の理念》を表現しようとしていることになる。《宇宙の生命活動》では諸法と色+受想行識の係わりが、大きな意味を持つことになる。

『多元環境』とは、空の立場から見た環境の基本設計と生成と管理のためのコントロールシステムであり、この中には、時間、自然現象、動植物の生命活動としての「現象」と、「人間」が係わっている様々な「人間」関係を含む『事象』の生成と管理の意味合いが含まれる。

□次にここで、諸法を空ではなく、空相と表現していることを考えてみよう。

諸法は『多元領域Ⅱ』の存在であるが、その創造物の『事象』は『二元領域』の存在を含む『多元領域Ⅲ』の存在である。そこでは『色と受想行識』の活動を全ての次元で受け入れ、『多元環境』として、積極的に管理運営することが主たる目的としているからである。

即ち、諸法は、『多元環境』の中に、空に完全調和する空相として、既に空の絶対普遍の価値体系の変換投影を成し終えている。空相とはまさに絶対普遍の価値体系であり、『宇宙の理念』としての空を相として表現したものである。諸法は空の特質を持つ空相である。これを本書で定義した語句を遣って表記すれば、諸法は空の絶対性と普遍性を相として持つ『多元領域Ⅱ』の存在である。絶対普遍の価値体系は当然の如く、「三対の語句」の条件を厳密に満たしている。

諸法は『多元環境』であり、空の『多元構造』と全次元において重なって存在している。本書の定義としては、『多元構造』『多元環境』『多元秩序』も『多元領域Ⅱ』であり、『事象』はこの『多元秩序』に支えられて展開される。

『多元構造』は空であり、『多元環境』と『多元秩序』は空相であり、次元数を取りながら安定した『フラクタル共鳴』の関係にある。言い換えれば、空と空相は、強力な『フラクタル共鳴』にある、とすることが出来る。ここは、この現代用語の説明で理解していただいた方が単純である。

ちなみに、『色と受想行識』も、空と『フラクタル共鳴』となる『事象』を求めて、『多元秩序』の中に、『宇宙の理念』を表現しようとしている過程にある。即ち、空はそこに空相を変換投影し、空性Bの範囲を広げようとしていて、その過程にある。そしてそれこそが『宇宙の生命活動』である。

言い方を変えてみよう。空はそこに空自身を変換して投影した、空相を産み出し、空相を環境として生命活動を展開し、そこに空そのものである色と受想行識として、その世界に降りてきたのである。そしてそれが『宇宙の生命活動』なのである。

ここまでの説明の経緯として、空の属性として、空の側から『多元構造』を定義し、一方、諸法の属性として諸法の側から『多元環境』を定義したことになる。しかしながら、前述のように両者は完全な『フラクタル共鳴』の状態にあり、その違いとしては、その重なり密度である。そこで、この両者の性質を同一としても矛盾は生じない。この密度の差で名称を付けて分けたということになる。即ち、敢えてその能力を限定した、空の特殊の状態が空相である、ということになる。

連続して説明すれば、空は『宇宙の理念』であり、それは『超実体』であり、『多元構造』であり、それが『多元環境』に対応し、そこに生命活動のプラットフォームとしての『多元秩序』を構成し、それは空相であり、そしてそれは、諸法であることになる。

□『宇宙の理念』に対して、補助線として『超実体』という『多元理論』を適応した事の意味は大きい。

この補助線により、空の属性の『多元構造』が、諸法の属性の『多元環境』と、密度を異にして完全に重なっていることと、その『多元環境』が『宇宙の生命活動』のプラットフォームとし

ての『多元秩序』を与えていることを説明できたことになる。

それは即ち、根源に於いて空相は空であることを示していることになる。

強いてその違いを言えば、重なるの密度と、空の中心からの距離を示す、次元数の違いと、見る方向の違いであろう。

この『多元環境』の全体像は五感では捉えられないし、知覚も認識も出来ないが、『多元環境』が創る『多元秩序』の最下層の時間、空間、及び物質を含むエネルギーは、観測可能である。さらに、そこで展開される、物理的科学的、生物学的「現象」は、五感で捉えられる姿で存在している。

しかも、『人間』が生きる環境は、決してこの五感で捉えられる環境だけではなく、この地上の「環境」だけではない事にも、思いを至らせなければならない。即ち、『多元環境』は肉の身を持った「人間」の環境だけではないという意味でもある。

後に示すが、『多元秩序』が創るプラットフォームには、過去現在未来を同時に生きる三世諸仏が活動する高次元の「環境」も、存在するということになる。

さて、ここで、一度「諸法」が『多元環境』であると再定義されれば、諸法の下では、「人間」一人一人の固有の体験により、それぞれに様々な個別の「事象」が展開することであっても、まったく矛盾は生じない。

しかも、この『多元秩序』の中であれば、超越意識、及び潜在意識、顕在意識の「事象」は、「人間」の思考と行動が創ることから、そのものが、『多元秩序』という「場」に、複数重複して存在していることに成る。

これは断片的な「事象」の展開である。この断片の世界は、『多元秩序』を「場」としていて、他者の「事象」との係わりを通して、影響を及ぼし合う。これは即ち、「朱に交われば赤くなる」世界である。

この「事象」の世界は、最終的に『フラクタル共鳴』が強いものが存続し、それぞれが係わり合いながら、他はベクトル昇華されて、結果として淘汰され、進化し、その事で《宇宙の理念》の表現が展開していく。

『多元秩序』と、その根源の『多元環境』は、五蘊と『色と受想行識』を『二元領域』の世界まで含めて受け入れるための、「環境」の「設計方針」や「管理方針」や「運営モデル」や、それらが複合した存在である。

さらに、『多元環境』は、色と同じように、空から分かれた生命（霊や、自然神や大地の精霊、妖精、さらには大自然を司る神々）が活動できる『多元環境』でもある、ということも記憶にとどめておきたい。

□ここで諸法の重要性をもう一つ示しておきたい。例えば、霊とか、神とか、精霊とか、魂魄とか、それから様々な霊現象さえも、そしてさらに、あの世とか、生まれ変わりとか、いわゆる神秘主義として、批判的に扱われがちな概念も。さらにはユングのいう「集団無意識」や共時性も、この諸法が用意した『多元秩序』、さらには諸法が創った『事象』として、かなり具体的な概念として扱う事が可能である。即ち、理論的な説明が可能であると言う意味である。

形而上学的存在には、実在の色と非実在の色の事象が混在している。事象は常に無の対象であ

る。しかも、『事象』を実在と錯覚する危険があるので、一旦は徹底的に否定しなければならないのである。しかしながら、悟りを得て、空を深めれば、形而上学的な存在を含めて、玉石混淆の状態の中から、『フラクタル共鳴』となるベクトルの選択が可能となるのである。

『多元環境』は、『宇宙の理念』がその生命活動のために環境として変換投影した、「場」であるからである。それは即ち、如何なる現象も、諸法が用意した『多元秩序』の上の『事象』として定義できるからである。

ここは空がそれを望めば、どのような存在でも存在させて、その活動の環境を創ることが出来るから、である。それをもし、「あり得ないほど不可解なことだ」というならば、まったく同じくらい、「ここに『人間』が生きていることは、あり得ないほど不可解なこと」なのである。

我々の世界の比喻で言えば、前出の比喻をそのまま利用して、『多元環境』とは、コンピュータの基本ソフトウェアであり、そこに応用ソフトウェアとして、望む者を組み込めば、どのような存在でもそこに生成できるからである。「それがそこに有るか無いか」は、「それを望むか、望まないか」だけの違いだけであるからである。

即ち、般若心経においては、形而上学的な存在を含めて、人間が体験する、如何なるものをも、一切漏らさず、位置付けが可能である。

『事象』と空性

諸法の機能によって、人間との係わりによって創造されたものが『事象』であり、それは創造物であるが、そこに「人間」が係わり、「人間」から見ると、『二元領域』的世界に見える。しかし『事象』を存在せしめ、管理している諸法は定義から空相である。空相は『多元領域Ⅱ』の存在である。

諸法の管理する『事象』の中で『フラクタル共鳴』に至ったものは、『二元領域』的存在から発生したものであっても、空性として格上げされるのである。空性は『多元領域Ⅲ』の内部に『二元領域』と一緒に位置付けられるのである。

□本書に於ける『事象』を厳密に再定義する。

ここで『事象』をベクトルと思考を含む出来事とする。

この時『事象』は『多元領域Ⅰ』と『多元領域Ⅱ』を除く、『多元領域Ⅲ』の世界で展開されることになる。そして、『多元領域Ⅲ』は全て『事象』である。これは本書で定義された語句であることに注意すること。

ここで、『多元領域Ⅲ』は本質的には空性であるが、錯覚を持つ人間には、空性には至らない『二元領域』として見えている領域があるので、『多元領域Ⅲ』には、空性と空性に至らない領域と、二つの領域から成り立つことに成る。『二元領域』は空性に至らないが、『多元領域Ⅲ』の一部分と定義する。(巻頭図を参照)

このことから分かるように、空性と『二元領域』は対立する概念ではない。『二元領域』は空性の内部に含まれる錯覚部分とする位置付けである。

『事象』の中で、「人間」の思考と行動の対象となる事象を「事象」と表記し、時間・空間と物質と、エネルギーの物理法則が支配する物理空間の『事象』を、ここでは特に、「現象」と表記することにする。『事象』とはこの全てが係わっていることになる。

『事象』とは、「人間」からは「事象」と「現象」しか見えないので、限定的であり、他から

分離し、『二元領域』的存在に見えるが、観音様の立場からは、常に『多元領域』的存在であり、従って、観音様からは『事象』は『多元領域Ⅲ』の空性Aなのである。もちろん、この観音様の見解が最も本質的見解である。

しかし同じ『事象』であっても、「人間」から見ると、時間的、空間的、意味的に、分割分断されているので、決して空性Aには見えない。見る方向によって、分断されていると、錯覚して見える。この時『事象』は一部は『二元領域』であり、一部は空性Bとなる。

しかし、本質的には『多元領域Ⅲ』なのである。ここには空性Aと空性Bが混在して存在していると言えるが、それは観音様と人間の見解の相違であり、ここには「人間」の錯覚も一時的に存在が許されている事になる。そして、「人間」が悟りを得ることで、観音様の空性Aの見解に近づくのである。

□実は、「悟りA」ではなく「悟りB」に徹した認識で展開することが、般若心経の真骨頂である。般若心経は、空を説くのが最終目的ではなく、空を理解した後、衆生救済につなげる事こそが最優先の目的であることがここに如実に現れているのである。

現実を生きる「人間」に合わせて、般若心経は解かれている。

このままでは『事象』は決して空性Aには成り得ない「人間」に合わせて説かれているのだ。

それは即ち、般若心経は、「悟りA」を求めるのではなく、「悟りB」を求めることに徹していると言えるのである。

□さて、以上の理解によって、我々修行者は、背伸びをせずに、安心して『二元領域』の世界を生きて、そこから悟りに至る道を追求できることになるのだ。

切り取られる『事象』

□観音様から見た場合には、『二元領域』の存在がなくなるので、『事象』は全て空性となり、不生不滅、不垢不淨、不増不減を柔らかく適用すれば、成立するのであった。

そこで最初に、『事象』に関する不生不滅、不垢不淨、不増不減の柔らかな適用による見解を示そう。空性を念頭に置いて以下を読み進んで欲しい。

観音様であれば、『事象』に対しても、柔らかく「三対の語句」が成立することを示す。そして人間には錯覚があるために、これは成立しないことをも同時に示す。

□「人間」は、時間と空間と一塊の意味に縛られていることを自覚しよう。

「事象」と呼ぶとき、既にある塊を想定しているのである。

その塊は本来は『事象』の中に有り、しかもそこに、他の『事象』との間に境界は無く一連のものである。生と滅、垢と淨、増と減の対の語句はどれもこれも、『事象』を、時間と空間とその意味を限定して、一塊と見ることから発生する概念である。本来は『事象』は、時間と空間とその意味が限定されずに存在していて、《宇宙》という「全存在」に連続的につながっている概念である。

それを「人間」が勝手に、時間で切り取り、空間で切り取り、意味で切り取ってしまうので、そこに生と滅が発生し、分離したように見え、外と内とで垢と淨が対立するように見え、内部にも対立があるように見え、全体から切り離れた、部分の中で増と減が生じているように見えるのである。

例えば、まさに「今、一つの『事象』を考えるととき・・・」と言った瞬間から、既に『事象』を時間と空間と意味とで、切り取ってしまっていることに気づくだろう。

「人間」とは、このようにしか『事象』を捉えられないのである。

時間と空間と意味で区切ってしまうから、その部分だけ、一塊として浮き上がって、他と対立し、内部で対立し、即ち『二元領域』として見えてしまうのである。

従って、観音様の立場に戻って、『二元領域』の要素を解消すれば、『二元領域』を超越することになり、その時『フラクタル共鳴』に至り、空性Bは空性Aに一致するのである。ただし、これは後述するように、簡単なことではない。

従って、「事象」は『事象』の一部であり、しかも、「人間」が捉えている「事象」は「事象」全体に対して、時間的に空間的にも、一部分であり、そして特に時間軸において、全体像を捉えることは不可能である。

本書では、『時間軸を超越して』と言う表現を遣っている。それに対応するのが不生不滅である。

垢と浄、増と減の『二元領域』に関しては、人生経験を積み重ねればそれなりに体験から理解できることである。

「人間」は経験的に、自分の係わる「事象」が、隣で生じている「事象」との関係に於いて、切り離せないものであることは判断できる。

一番難しいのは、生と滅で表現されている時間軸上の関連性である。今ここに自分の係わる「事象」が、一週間後に生じる新たな「事象」との密な係わりによって、大きく変化して展開することは、「人間」には予想できないことなのだ。

これは悟りを得ても、顕在意識では事象の全体は分からないのだ。悟りを得るということは、色が『事象』の全体を捉えていて、超越思考によって思考することである。顕在意識で全体を捉えることは実質不可能である。それが悟りであり、従って、悟りといえども、顕在意識で『事象』を構成する個別の全てを具体的に知ること、『フラクタル共鳴』に至るのではない。悟りを得ていない人は、しばしば誤解するところであるので、この認識は重要である。

そこで本書では、しばしば「時間軸を超越して」との表現で、『フラクタル共鳴』状態にあることを示している。

□不生不滅、不垢不浄、不増不減を有限の範囲において、柔軟に適用すれば、観音様の立場であれば、『事象』に対しても、「三対の語句」は空性の必要条件ともなっているのである。だから空性は空そのものではなく、空のようなものなのである。

従って、これだけ説明しておきながらも、般若心経の趣旨としては、これは「人間」には当てはまらないとしているのである。

この見解は空性を理解する上では後に生きてくるが、般若心経に於けるこの節の見解は、厳密には『事象』を除いて、不生不滅、不垢不浄、不増不減は空と空相の、空のそれぞれが空であるための必要条件であることを示しているのである。

三種類の空の区別

◆解説キー◆ 第四節の冒頭で、再び舍利子に語りかける。この語りかけは前と重複しており、無くても意味は通じる筈なのだが、再度舍利子に呼びかけて、前節とは明らかに何かを使い分けられていることを示唆している。

□同じように舍利子から始まる前節には、空の文字が合計四個（サンスクリット語原典では六個）

有る。これらはまったく同じ語句であるから、この四個の空の意味は当然同じである。これを今、代表して、色即是空の空と呼称することにする。

色即是空の空は『多元領域Ⅰ』の存在であり、空相と定義した諸法は『多元領域Ⅱ』の存在であり、どちらも空なのであるが、両者は明確に区別されている（【文献一】。）

色即是空の空は色と受想行識にのみ遣われる表現であり、『色と受想行識』は特別の空である。本書では、それを完全空とした。

さらに本書では、色即是空の空と五蘊皆空の空とも区別して解釈した。その根拠を示そう。

サンスクリット語に戻って確認すると、五蘊皆空の空は、【文献一】では空を特質とするような存在（形容詞の「シューンヤーン」）として表現されている。一方、【文献三】（→金沢篤・[梵文『般若心経』（小本）、の「空」]（駒澤大学仏教学部研究紀要第68号 平成二二年三月））では、対応するサンスクリット語「スヴァバーヴァシューンヤーン」を、「自性空」と訳している。

形容詞ということは「・・・の様な」とか、「・・・的な」という、弱い意味であり、本書では「空の性質を持つ状態」として、空性と訳した。

そして一方、色即是空の空は、条件無しの、空そのもの（名詞のシューンヤター）」として表現されている。

これは、【文献一】の前節の宮元啓一氏による【サンスクリット語直訳】にあるように、色即是空の空は、「そのものずばり空なのである」として、記述されていることに合致する。当然、受想行識も「そのものずばり空（「シューンヤター）」なのである。

さらに【文献三】によれば、五蘊皆空の空と色即是空の空は、【文献一】と同様にサンスクリット語では、異なる表現であり、区別されているという事実が読み取れる。

総合すれば、ここでは、五蘊皆空の空と、色即是空の空と、諸法空相の空とを使い分ける必要があることになる。

この辺の文献を読むと、サンスクリット語の文法論争が成されていて、私には、この論点は関係無いとした。どの道、ここでの論点は空虚な空であるから、である。

そこで私としては、文法的に「五蘊皆空の空と、色即是空の空とはそれぞれは同一の空ではない」という事実のみを受け入れるだけで十分としたい。

□纏めると、空は三種類に分類する事が出来る。それは以下の様になる。

般若心経に出現する順に並べて表示する。その分類は巻頭図を参照のこと。

■【空性と皆空】 皆空＝空性＋とする。空性は『多元領域Ⅲ』で、空の性質を持つ状態である。《宇宙の理念が表現された状態》であり、「事象」と「現象」の中で「フラクタル共鳴」の状態にある。便宜上、『多元領域Ⅲ』に於いて空性Aと空性Bに分けて考えることができる。

一方、皆空は全領域の『多元領域』（Ⅰ～Ⅲ）の全範囲となる。

（1）五蘊皆空の皆空は、全ての領域『多元領域』（Ⅰ～Ⅲを含む）を意味しており、厳密には以下の『多元領域Ⅲ』を満たす空性Aとは区別する。

形容詞とするのは、そのような厳密さを薄める意味もあると言える。次節で再度論じる。

（2）『多元領域Ⅲ』において『事象』の一部が『フラクタル共鳴』に至った場合は、空性Bとなる。空性Bは空性Aと同質の空であり、空性Aの領域の一部である。空性Bは「人間」から見た《宇宙の理念が表現された状態》であり、「事象」と「現象」の中で「フラクタル共鳴」の状

態にある。空性Bは各個人によって異なることになる。観音様の場合は空性Aである。

※空性については第五節に於いて再度厳密な議論をする。

■【空】 色即是空の空は、完全空である。『超実体』そのものの空である。「そのものずばり空である」ことを示している。つまり、空そのままの空であるという解釈である。即ち、色は『超実体』としての空そのもの、そして受想行識も『超実体』としての空そのものなのであることを重要視したい。

■【空相】 諸法空相の空は、空そのものずばりではない点で「そのものずばり空」とは区別されるが、空の特質を持つ存在である。《宇宙の理念》を絶対普遍の価値体系を相として表現した空である。

これを、空の中心からの距離が近い方から、即ち『超実体』の中心から次元数の差が小さい方から言うと【空】→【空相】→【空性】となる。

空性は《宇宙の理念が表現された状態》であるが、観音様から見る空性（空性A）と、受想行識から見る空性（空性B）は重複しながら、範囲が異なることになる。

諸法空相の空は、前節の色即是空の「そのものずばり空」と区別される事を明確にするために、舍利子への語りかけを繰り返して、第三節と第四節を分断していることになる。言い換えれば、第三節の色と空の関係を特別視するために、区切っているのである。

諸法空相の空は《宇宙の生命活動》を維持するために絶対普遍の価値体系を相として持ち、空の範疇であるが、『色と受想行識』のように、空そのものの空とは区別される。あくまで『色と受想行識』のサポート役なのである。

これが、第三節と第四節の明確な区別である。

これらの『多元環境』の下にある「環境」とその中で営まれる様々な現象は、当然「人間」との係わりが発生し、「人間」の思考と行動の影響を強く受け、それを受け止めているのも諸法の働きである。

『人間』は『多元秩序』の中で生きるのである。『人間』は諸法に支えられながら、この諸法の用意した『多元環境』を思考と行動の環境として、生きることになる。

□この限られた字数の中で、一見無駄な重複のように見える、舍利子役への再度の呼びかけの理由は、このように主役の空と脇役の空との違いにある。

空の中心から色を通して直接降りてきたそのものずばり空である受想行識は、空相を通して降りてきた空をその特質とするような諸法の一機能の『多元秩序』と出会うことになる。その出会いに於いては、互いに空でありながら、その次元数がまったく異なることになる。

それは「現象」を支える『多元秩序』の一部、即ち「時間・空間・物質を含めた全エネルギー」との劇的な出会いである。

そしてさらに、諸法が絶対普遍の価値体系を相として、「人間」との係わりで創り出し、『フラクタル共鳴』にまで導こうとする「事象」との出会いでもある。

□この章の冒頭の舍利子への再度語りかけの理由は、受想行識の特殊性を示すことにある。

結論として、受想行識だけが、空のまま地上で活動できる唯一の存在であり、その真実を伝え

るために、敢えて、再度の舍利子への呼びかけとして、前後で区別したことになる。

◆解説キー◆ 受想行識だけが、地上から「空への帰還」が許されている。

□地上にいる存在で空の表現者は受想行識としての「人間」だけである。色の主導の元にある受想行識だけが、地上で直接活動できる存在であり、業務終了後は、「空への帰還」を果たすことができるのだ。

『人間』は、たまたまここに生きているのではなく、《宇宙の生命活動》を営むための「場」である、諸法という『多元秩序』の中に、「空からの展開」により、空のまま降りてきて活動し、生かされていて、任務を遂行の後、「空への帰還」の道も与えられているのだ。

この事は、『何と特殊な存在であることか』と言う、喜びと感謝の気持ちを惜しみなく表現すべきと思う。

□この節は暗号に満ちており、直接理解は困難であり、本書で示したように、現代用語で論理的に理解していただいた方がよいと思う。

宇宙規模の生命活動

□《宇宙の生命活動》の中では、『人間』が主役であり、『人間』だけが、唯一の地上の存在であり、まさに特別の存在であるという真実である。

この場合、『人間』とは『色と受想行識』の事であり、それは地球上の存在だけではない。これは宇宙的規模で考えなければならない。そして当然諸法空相も宇宙規模で考えなければならない。『人間』が生きる環境としての諸法は宇宙規模であるからである。

この真実を知れば、傲慢になるのではなく、ますます謙虚にならなければならない。

□ここで、仏教は宗教であるから、空の構造を示したいだけでなく、あくまで救済を目的としていることから、『人間』はもう初めから、空相という《宇宙の秩序》の中で生かされているのだ。それに気づいていないだけだ。後はそれに気づくための修行があるだけだ。だからもう何も心配はいらないのだ。先に安心してしまいなさい』と強く語りかけているのだ。

この段階で安心が出来れば、それは時空を超越したことになる。時間軸の拘束から解放されたことを意味する。

ここまでの理解だけで安心を手に入れることができる人は必ず居る筈だ。時期さえ来ていれば、これだけで人は十分救われるのだ。

□ここまでの結論として《宇宙》に存在する全ての全ては、《宇宙の理念》と、その変換投影と、その表現であり、それ以外のものは存在しない。

そして『人間』は空から分かれた空そのものであり、空の変換投影した環境で生命活動を営んでいる存在である。という真実を二百六十二文字の中の七十二文字を遣って示したことになる。

「定説」の空との比較

□一応、三種類の空が出揃ったこの時点で、仏教界でこれまで「定説」となっている空の解釈と、比較をしてみたい。

本書に於いては三種類の空が定義され、それぞれには、深さと範囲が有ることを示した。

一方、仏教界の「定説」に於ける「実体の無い空」も複数に分類されていると解釈できる。しかしどう考えてみても「実体の無い空」をわざわざ数種類に分類して、二百六十二文字中七十二文字も費やして、「実体の無い空」の程度を説明する必要が、どこにあるのだろうか。

「定説」では、五蘊という『世界』は、全て、実体が無いようなものである。そして、色と受想行識は最も実体が無いのである。さらに、諸法は実体が無い存在を変換投影した相である。

そして、実体が無い空の中には、色は無い、受想行識も無い、と次節に続くことになる。これでは全く意味が通じない。

「実体が無いような空」と、「全くもって、実体が無い空」と、「実体が無い空の相」と、・・・、これら数種類の「実体の無い空」は、何が違うのだ。それを分類すること自体に、いったいどんな意味があるのだ。しかも、色不異空空不異色・・・として、最も深い空である色と受想行識が、つまり人間が、宇宙の中で最も実体が無い存在ということになる。人間は動植物や事象よりも、もっと実体が無いことになる。そのような全くもって実体が無い空を体得して悟りを得たとすれば、それは、全くもって実体の無い悟りである。

空が『超実体』であるからこそ、そのものずばりの『超実体』を体得して悟りを得ることに意味があるのである。当然の事である。

このように、「定説」による空の分類が、まったく意味を成さないことから、空は『超実体』とするものの合理性が示されたことになる。

□そしてさらに、不生不滅、不垢不淨、不増不減の解釈についても、「定説」ではまともな説明になっていない。

「定説」では、その解釈はバラバラで、納得できる解釈は存在しないが、この「三対の語句」が「実体が無い空」の性質を示しているという点では共通している。実体が無いから、生まれることも無く、滅することも無く、実体が無いから、汚れも無く、清くも無く、実体が無いから、増えることも無く、減ることも無い。と言うような解釈が多数派である。

しかし、これではまったく説明には成っていない。これは明らかに間違いである。複数に分類が出来るような中途半端な「実体が無い空」では、この「三対の語句」は理論的に成り立たない。しかし、もし本当に全くもって完全に「実体が無い」のであれば、「三対の語句」だけではなく、不高不低でも、不明不暗でも、不強不弱でも、不広不狭でも、不重不軽でも、何でも成り立ってしまう。要するに何にゼロを掛けてもゼロなのだから、際限が無い。しかし何でも成り立つのでは、空の説明にはならない。これでは既に理論は破綻しており、意味のある説明にはならないのである。どのみち「定説」では無意味なあがきなのである。

空を説明するのであれば、『何故にこの語句、即ち生と滅、垢と淨、増と減を選択し、さらにそれを対比的に示して、それを「不」で否定したのか』を示さなければならない。空を説明するためには、この語句の選択の意味を明確に示さなければ、この「三対の語句」無効であり、無駄となる。

さらには、「不」で否定することと、次の第五節で、「無」で否定することとの違いについても、合理的な説明は見当たらない。それは即ち「三対の語句」は「定説」では成り立たない事の証明となるのである。

□既にこの第四節で詳しく説明したように、空相を説明するために用意されたのが「三対の語句」である。ここでは空が『超実体』であるからこそ、この「三対の語句」の選択と対比が十分な意味を持つのである。

それは即ち、空相の、二元領域的存在からの超越性を示している語句である。繰り返しになるが、不生不滅は、空の「永遠性」を示しているのであり、時間軸上の超越性を示しているのである。次に、不垢不淨は、空の完全性を表して、さらに《宇宙の理念》である空の変換投影としての「絶対普遍の価値体系」を示して、善と悪の対立する相対価値からの超越性を示しているのである。次に、不増不減は、諸法の働きとしての「現象」からの超越性を示し、「現象」の背後にある時間と空間と物質を含むエネルギーを示すと同時に、複合的に人間の認識により、空間と時間と意味とで部分を切り取った『事象』からの超越性を示しているのである。

このことから、「三対の語句」は、空は実体が無いのではなく、『超実体』以外の何物でも無い事を示しているのである。

これらのことから、空は「定説」ではなく、『多元理論』の『超実体』でなければ、般若心経はまったく成り立たないことは明らかであろう。

従って、もし本書に反論するときには、必ずこの「三対の語句」を説明していただかなくてはならない。

□五蘊皆空の空から始まって、『超実体』そのものの空まで、これまでの仏教における常識を大きく破っている。般若心経におけるこの複数の空の概念こそ大ショックであり、この事に最大注目しなければならない。

観音様が、人間は色と受想行識の二つの空から成っていて、色は空そのものであり、受想行識も空そのものであり、生命活動の場の諸法も空であり、《宇宙》そのものが皆空であると明らかにした事で、これまでの初期仏教の常識は完全否定された。空とは実体が無い虚無的な存在ではないことが、ここに示された。

観音様が、『空とは『超実体』であり、色と受想行識、即ち『人間』が空そのものであり、しかも空相に包まれて守られているのだ』と宣言し、そして仏陀がそれをその通り認めたのである。だからこそ、大本般若心経（【文献四】）にあるように、その場が歓喜に包まれたのである。

□空がこれほどの存在であっても、『超実体』ではなく、《宇宙の理念》ではなく、『多元構造』ではなく、空虚とか、実体が無い、と解釈してしまうと、空は皆無の意味となってしまって、せっかくの般若心経は、極めて虚無的な解釈になり、唯物論的悲観論になってしまう。そして後は全く意味が通じなくなり、これまでの、無常観的な面を越えることは出来なくなり、実に難解な整合性の無い、般若心経になってしまう。そしてそこに何ら驚きも、新たな感動も出てこない。

参考までに、般若心経の冒頭の部分をインターネットで検索したところ、以下のような解釈を見つけた。これは今ある標準的な解釈と言えよう。<http://www.e-sogi.com/arekore/kyo1.html>【参考資料一】

『人は私や私の魂というものが存在すると思っているけれど、実際に存在するのは体、感覚、イメージ、感情、思考という一連の知覚・反応を構成する五つの集合体（五蘊）であり、そのどれもが私ではないし、私に属するものでもないし、またそれらの他に私があるわけでもないのだから。結局どこにも私などというものは、存在しないのだ。しかもそれら五つの要素も幻のように実体が無いのだと。そして、この智慧によって、すべての苦しみや災いから抜け出すことができました。・・・』

これは、何とも虚無的な解釈ではないだろうか。これが衆生救済を目的とする宗教なのか。千

年以上もこのような解釈を多くの人が信じてきたのであろうか。

はっきり言って、これは、仏教で語られている末法の世、そのものではないのだろうか。ちなみに、末法を検索してみると。以下ようになる。

末法とは、仏陀が説いた正しい教えが世で行われ修行して悟る人がいる時代（正法）が過ぎると、次に教えが行われても外見だけが修行者に似るだけで悟る人がいない時代（像法）が来て、その次には人も世も最悪となり正法がまったく行われぬ時代（＝末法）が来る（ウィキペディアから引用【参考資料二】）。のだそうだ。

□「定説」では、まったく虚無的世界を説き、『自分（私）などというものは存在しない』とか『実体が無い』とは、それではあまりに唯物論的であり、無神論的であり過ぎて、これではまるで宗教にはならない。ましてや救いにはならない。何も無いから苦厄も無いという、虚無思想の極致である。ここでの般若心経は、「実体の無い観音様」が「実体の無い空」を説いていることになる。

□さて、初期仏教を学んだ舍利子役に対して、今更、『「人間」は一瞬の存在であり、はかない存在であり、無常な存在であるから、そこに「実体は無い」。』等と言っても、それは当たり前過ぎる程当たり前である。これでは「劇」には成らない。これでは初期仏教を一步も超えてはいない。これでは初期仏教の解釈そのものであるからである。

肉体や五感が無常であり、無に帰すものであることは、これまでの初期仏教の修行者には既に常識である筈である。そしてそれは唯物論でもある。いまさら、肉体や五感の世界が、空虚であることを説かれて、それに感動するとか、覚醒すると言うことはあり得ない。

□本書では、歴史的にも、従来の初期仏教から決別し、新たに生まれた大乘仏教のさらなる展開のために、大乘仏教がさらに整理され、洗練された般若心経が編纂されたのだ。との見解を取る。

従って、般若心経には、見事に大乘仏教の本質が凝縮されていると考えられる。そしてその事は、もし般若心経を原典に戻って解釈しようとする、ましてや初期仏教まで戻って解釈しようすると、たちまち矛盾を生じ、却って未整理の中に入り込み、混乱する事を意味している。そのような混乱が今でもしばしば見られる。般若心経は般若心経で良いのであり、他経典を参考に読むものではない。

□般若心経の二千年の主張とは、『先ず最初に、暗号に秘められた空の真実を解き明かし、その謎を解き、『般若波羅蜜多の瞑想と行により、空を深めて、自分の悟りを完成するだけではなく、観音様の導きで、他者に働きかけて、苦厄を解消し、衆生救済、社会、国家、人類の救済へ進展する「空からの展開」へと移行する』とすることである。』

仏教とは哲学的ではあっても、救済を説くと言う点で、宗教でなければならない。そしてもし、救済の力がなければ、それは宗教とは言えない。

□これらの事から、般若心経の立場は初期仏教に対する【大どんでん返し】であると同時に、本書の立場は『多元理論』に立っており、「定説」とは正反対であり、従って「定説」に対する【大どんでん返し】と成っていることにも注目していただきたい。

積み残された問題

□様々な理由があると思うが、世の中には、空の定義が、まったく虚無的で唯物論的なものから、何かを臭わせるような曖昧なものまである。「からっぽ」という空から、敢えて曖昧にして、『曖昧こそ空である。』と言っているものまで、分散している。

そして同時に、哲学的で難解である。『難解だから有り難い』と言っているようでもある。

◆解説キー◆ 空は時代によって、その意味が変化する。これは決して見逃してはいけない重要な事実だ。

□空はいつから、曖昧で、難解で、虚無的で、唯物論的な「定説」になったのか。

既に示したように、文献の意味するところは、初期仏教から大乘仏教に至って、空の意味するところは急速に大きく変化しているという、見逃せない事実である。

現に、今ここには、「実体が無い」空虚な空から、『超実体』の空まで、まるで正反対の意味にまで、意味は広がっているのである。

□直訳として引用した【文献一】のサンスクリット語直訳をみても、空に対応するサンスクリット語の和訳は、「本体を欠いている」として、「実体が無い」と同じような意味に和訳されている。サンスクリット語の文法では、きっとそうなるのだろう。それは他の資料でも同じである。

しかし、【文献二】の重要な指摘にあるように、時代で大きく変化する空に於いて、般若心経編纂時点での、仏教で扱う空の意味が、果たしてこれで良いのか否かは、まったく考慮されていないように思われる。

□ここで、私のスタンスを明確にしておく。

例えば、古代遺跡から古文書の医学専門書が発見されたとしたら、当時の文法に沿った正確な翻訳を試みる作業をすると同時に、一方では、当然現代の医学との対応を試みるだろう。私は後者の立場である。

即ち、私は、般若心経を、学問としてではなく、衆生救済を目的とする、宗教として位置付けて、解釈しようとしていることを、そしてさらに、本書は、空を体験した側から、私の体験した空と般若心経の空との整合性を確認しつつ書いていることを、改めて確認しておきたい。

ここで、「空を体験した」という意味は、決して虚無を体験したという意味ではないことは、既に明らかだろう。

この立場から言えば、般若心経の編纂者は『多元理論』に立っていなければ決して書けない内容であり、般若心経の編纂者が『多元理論』であったことは疑う余地が無い。

何故なら、もし虚無的な「定説」であれば般若心経はまったく意味をなさないからだ。現に、それでは全く一貫性の無い、意味不明の内容と成るし、ここまで意味不明の般若心経では、全く苦厄の解決にはならないし、ましてや衆生救済など到底出来るわけがない。これではとても宗教とは言えないからだ。

このような「定説」がどの時点から始まったのかは明確に分からないが、ここで仏教が衆生救済を目的とする宗教である限り、「定説」では成り立たず、『多元理論』でなければならないとして、議論を先に進めたいと思う。

□現時点で、文書や資料で確かめようとすると、空虚な空しか見当たらない。まさにそれが「定説」である。

□さらに「定説」とは違って、「空曖昧説」と言うべきものが存在している。その例としては、私が二十代の時だったと思うが、禅僧の説法を聞いた時の記憶では、決して空虚な空ではなかったと思う。しかし公には肝心なところはぼかして語る。その後も、断片的に触れた、禅の思想においては「空こそ本質である」と理解していて、私の中ではそれで全く矛盾は無かった筈だったのだ。しかし執筆のために最近集めた資料では、それが確認できず、実に曖昧であり、そのギャップに驚いている。

ここで、「定説」は論外だが、私はこの「空曖昧説」には真実があるのではないかと、大いに期待をしている。しかしこの曖昧な姿勢には大きな危険がある。もし、真実を知りながら、説明を曖昧にして、それがとらわれない姿だとして、自己満足しているのだとすれば、この曖昧さの中に、錯覚がすぐに入り込み、真実は隠されてしまう。そして同時に、無知も隠されてしまう。語彙の豊富な現代において、このような姿勢をとり続けることは実に不自然である。言葉の限界を知った上で、空が概念を越えるものであることを十分知った上で、堂々と正面から語って欲しいと思うところだ。

しかも、もしこの姿勢が意図的であるとするならば、これは傲慢であり、決して衆生を救う力にはなり得ない。この姿勢を採るには、この後に述べるような、歴史的理由があることは承知しているが、現代においても、なおこの姿勢を続ける理由はもう無い筈だ。もし続けるなら、秘密結社として生きるべきであり、衆生救済の看板は下ろすべきである。

秘密結社を認めるならともかく、仏教が衆生救済を目的とする宗教である限り、空に関する見解は、曖昧にせず、明確に語るべきと思う。

仏教修行者の本音はどうか。私は仏教の中に身を置く者ではないから、仏教修行者に確認していただく以外にない。

私の印象としては、実際には、文献で見ると、空虚な空は支持されてはいないのではないかと感じている。

元々、歴史の中で、空に対する様々な先入観と既成概念があるという不自然な思考環境の中で、私が般若心経を解釈するという、今の状況でないのであれば、敢えて、『超実体』という概念を、一番最初から導入しなくても良いのだ、と私は考えている。

もし、このような時代背景の様々なしがらみや、先入観が無い思考環境が整っているのであれば、限定の無い空を求める姿勢こそ、本来の姿である。

『超実体』は悟りの結果論であり、本書においては、現状の既成概念を正面突破するために、どうしても最初から結果を前面に出して解釈する必要があったのだ。

そしてそれが、同様に般若心経の姿勢でもあり、般若心経は真実を暗号化して正面突破しようとしているのだ。

問題提起

さて、今ここに、空の『多元理論』説と、空の「定説」とが、有ることになった。

初期仏教の時代は、空は、未だ中心思想とはなっていなかった。その事が何か特に大きな問題ではない。そして、もし、大乘仏教に移行しても、同様に、空が、中心思想でないのであれば、私は「定説」で、いっこうに、かまわないと思う。それで、矛盾も生じないと思う。(第六節[初期仏教でなら、空虚な空で正しい]を参照のこと)。

しかし、大乘仏教は初期仏教と違い、空を中心思想とする道を選択した筈だ。

しかし、それなら、空は宇宙の本質として、仏教の世界観を示す重要な語句として、初期仏教とは、全く違う空を、明確に再定義しなければならない筈だ。それにも係わらず、空それ自身についての解釈は、大きく変更はされなかったのである。そして、未だにその再定義が成されておらず、古い空を、そのまま引きずってしまうことになったのだ。

ここで、大乘仏教が、空を中心思想とすると、決めたときから、空を、どう定義するかの問題は極めて重要だった筈である。初期仏教の空のまま、それを仏教の中心思想とすることになれば、根本的な矛盾を起すことは、当時の誰の目にも明確であったのだが、それを食い止めることは出来なかったのである。

そして現代に於いても、空を初期仏教のままの、「実体が無い空」から大きく進展は出来ずに、未だに「定説」のままであり、大きな矛盾を抱えたまま存在している。

「定説」のままで、悟りに通じる世界観を構築できるとすることに、宗教としての大きな無理がある。

問題ははっきりしているのだ。そしてその解決法もはっきりしているのだ。空を中心思想とし、仏教の世界観を構築するに耐えうる空を導入すること以外に無い。語句の選択はどうあれ、実質『多元理論』の『超実体』とする以外に解決の道は無いのである。

あなたが、真実、宇宙の本質の空を求める修行者であれば、この問題を放置してはいけない。自分でそれを確かめなければならない。

「実体が無い」と決めつけて、論理を構築すると、その矛盾に気づかない。気づくことを拒否している、というのが正確だろう。

一般的に言って、「無いことを証明すること」は、極めて困難である。宇宙の隅から隅まで、全てを探してから、初めて「無い」と言えるのだ。

その、不可能に近いことを、最初から前提にすることは、実にばかげていて、愚かな態度だ。信じることは、信じるに過ぎないが、どうせ信じるなら、有る方を信じて、常に視界を開けておくべきである。もし、有ると信じれば、「実体の無い空」であっても、有るように見える。先ず「実体は無いが何かは有る」まで、「定説」を進展させることだ。

文献を読んでいて分かったことだが、「定説」の中には、「実体が無い」の「実体」とは「物体とか形態」という意味だとしているものがあつた。

これは「定説」の中でも、少数派であるが、実際にそういう解釈を見つけたことがある。「実体」を物質や形と捉えるのは、実に安易で浅い解釈であるとは思いますが、逆にここには解決の糸口が有ると言える。物体や形態という実体は無いが、もっと別の存在が有る、と言い換えることが出来るからだ。

そうすれば「形態は無いが、本質は有るのだとすれば、無いと言っても有ると言っても、似たようなものだから、結局有るのだ」という理屈だって成り立つだろう。しかしそれをするのは、私ではない。仏教関係者のどなたかが、すべきである。

本書で一番最初に定義したように、『超実体』とは、空の『多元構造』を満たしている、高次元の「場」であるとするれば、これは物体ではないから、見ることも、触ることもできない。これを発見するには、「定説」とは反対の姿勢で、それを、有ると信じて、探すことで、物体以外の、それを発見できるのだ。

現代物理学では、物体だけが実体ではない。否、むしろ物体は実体のほんの一部に過ぎない。しかし、二千年前ならば、「物体や形態が実体そのものであり、空は物体や形態ではないから、

実体では無い」との理解は、あり得た事なのではないだろうか。しかしそれを言ってしまうと、般若心経の編纂者達のグループを除いて、当時の人たちで、空を「実体が無い」と主張していた人達の、《宇宙》に対する理解の程度は実に浅いものであることになる。そのような人達によって当時の仏教が維持されていたとは考えたくないものである。

私には、過去も現在も、すべての仏教修行者が、「定説」であるとは、到底信じられないことである。『そんなわけが無い』と、強い確信を持っている。誰か偉いと思われていた人が「実体が無い」と言ったから、その権威に逆らってまで、反論できないでいるのだろう。その辺の事情を全く知らない私だから、本音を言えるのだろう、と勝手に思っている。そのような理由から、本書の執筆中には、以下のようなことを考えていた。

□ここで私は「実体が無い」空が生まれた経緯について、一つの仮説を立ててみたい。題して『仮説・般若心経の成立』である。

【仮説・般若心経の成立】。

そもそも、世界観を説かない宗教家は居ない。

仏陀は世界観を間違いなく説いたのである。その仏陀が説いた世界観が残っていないことが、重要問題なのである。しかし、世界観が歪んで伝わるよりは良かったと言えよう。

そこで、入滅後の仏陀は世界観の再構築を、後代の人に委ね、そこから、仏教は千年単位の大計画で進化することになったのである。

仏陀の世界観を正しく表現するには、抽象概念を表現するための豊富な語彙と、「宇宙とのフラクタル共鳴」を発生する適切な比喩が存在する時代としたのである。その条件は、未来において満たされるとしたのである。そしてそれがこの現代なのだと言えよう。

そして、結果から見て、その消えた世界観を正しく埋めるのが、般若心経の役割であり、仏教としての継続性を保って、この現代へと中継する役割の経典が般若心経なのだと言える。そしてそれは仏教としての継続性を保ったまま、正しく現代に中継されたのだと言える。

仏陀入滅後、数百年を経て、初期仏教の環境の中で、当初は空が中心思想では無かったが、未だ確立していない、仏教に於ける明確な世界観を示す必要性から、次第に空を中心思想とした、大乘仏教が成立していった。しかし、その大乘仏教の中でも、世界観そのものを示す空の解釈に関しては、常に論争があり、統一の見解は打ち出せずにいた。(第六節 [初期仏教でなら、空虚な空で正しい]を参照のこと。)

ここでは、空を体験した修行者個人よりも、組織の発言力が強く、歴史的に積み上げた語句を共通とする、初期仏教の影響を強く残した、学問の仏教が次第に有力な見解となって行った。それは、ある意味、当然の成り行きであった。何故なら、初期仏教と正反対の解釈をすれば、それは異端と成り、排斥されるのは、世の常であるからである。

そして、その内容は分析的に成り、哲学的に成り、本来の、空の体験者による、生き生きとした空の意味は失われてしまった。仏教に限らず、宗教が学問になってしまうと活力は一気に失われて、形骸化してしまうものである。

ここで、一つの見解が出た以上、空の体験者の解釈はタブー化してしまった。その結果、初期仏教と大乘仏教の根本的な違いが、不明瞭になってしまって、難解な空だけが浮き上がり、現在に至っている。

現在、初期仏教と大乘仏教の、両者の空の区別が不明瞭である、と言うことは、一旦、分離し

かけたものが、又、混じってしまった事に外ならない。

結局、般若心経の編纂までの、大乘仏教では、空の定義は初期仏教から、大きく変わることが出来ないままで、しかも、空を中心思想とするという、とてつもなく大きな矛盾を、抱え込むことになってしまった。

そこで、空を体験した仏教修行者達は、ここに大きな危機感を持ったが、もはやこの矛盾を排除、しきれないと判断し、次なる打開策を探した。

そこで日夜、議論を重ねつつ、瞑想を深め、「超越思考」を極めていった。

その結果、自分たちが体験した空による解釈の般若心経を、暗号化して編纂し、未来に残すことを決めた。そして、ここから千年単位の大計画が始まったことになる。

暗号化した般若心経は、語句の配列を見ただけでは、一見「定説」の様に見えるが、読んでも全く意味不明で、難解であるが、空を体験していれば、それを解読出来る暗号を、遂に組み立てた。

初期仏教の語句の範囲を超えることなく、初期仏教の語句をそのまま遣って、しかし、秘密裏に重要語句の再定義をして新しい概念を導入し、再定義したことを暗号の中に示し、真実の空を暗号化して説明し、外向きには空の具体的解釈を避け、真実は口伝として、体制派の攻撃をかわしてきた。それ故に、この危機的状況を切り抜けるためには、秘密結社的にならざるを得なかったことは、十分に理解できることだ。

そして以後、希望を未来に託したまま、この暗号をマントラとして、暗号を暗号のまま、解釈せずに普及して行く方針とし、その通り実践していった。そこで、般若心経側に立つ仏教修行者は、文字による記録を残さず、口伝を旨とし、外向きには無口を決め込み、無口こそ美德とされるまでにこのスタイルが浸透していった。そして、安易に真実の空を口にするのではなく、最高位の者にしか、真実は伝えられない秘密主義となったのは、経緯から当然であると言える。

ここではタテマエでは「定説」を装い、或いは「空曖昧説」にして、ホンネを隠し、ホンネは当然、実質『多元理論』でありながら、それを公式には言えない環境のまま、歴史は流れ、現代まで生き抜いてきた。

現代日本の大乘仏教の「空曖昧説」は、この流れの中にあると思われる。

しかし、長い歴史が流れれば、タテマエがタテマエであることを忘れ、ホンネとなってしまいうことも、十分にあり得る。今こそ、ホンネを取り戻すべき時期である。

そもそも大乘仏教が、初期仏教から、分かれた時も、及び、その後の大乘仏教の展開の中でも、今ここで、私が提起している問題と同じことが、繰り返し起こっているのではないのだろうか。

そして、現状の大乘仏教が、実質的にどうなっているのか、本当のところ、文献だけではよく分からないし、外側に居る私が、「どうこう」言うことは避けたい。

そしてもし「定説」が支配的になれば、これはいつの時代でも十分起こり得る改革運動である。

第四節 おわり